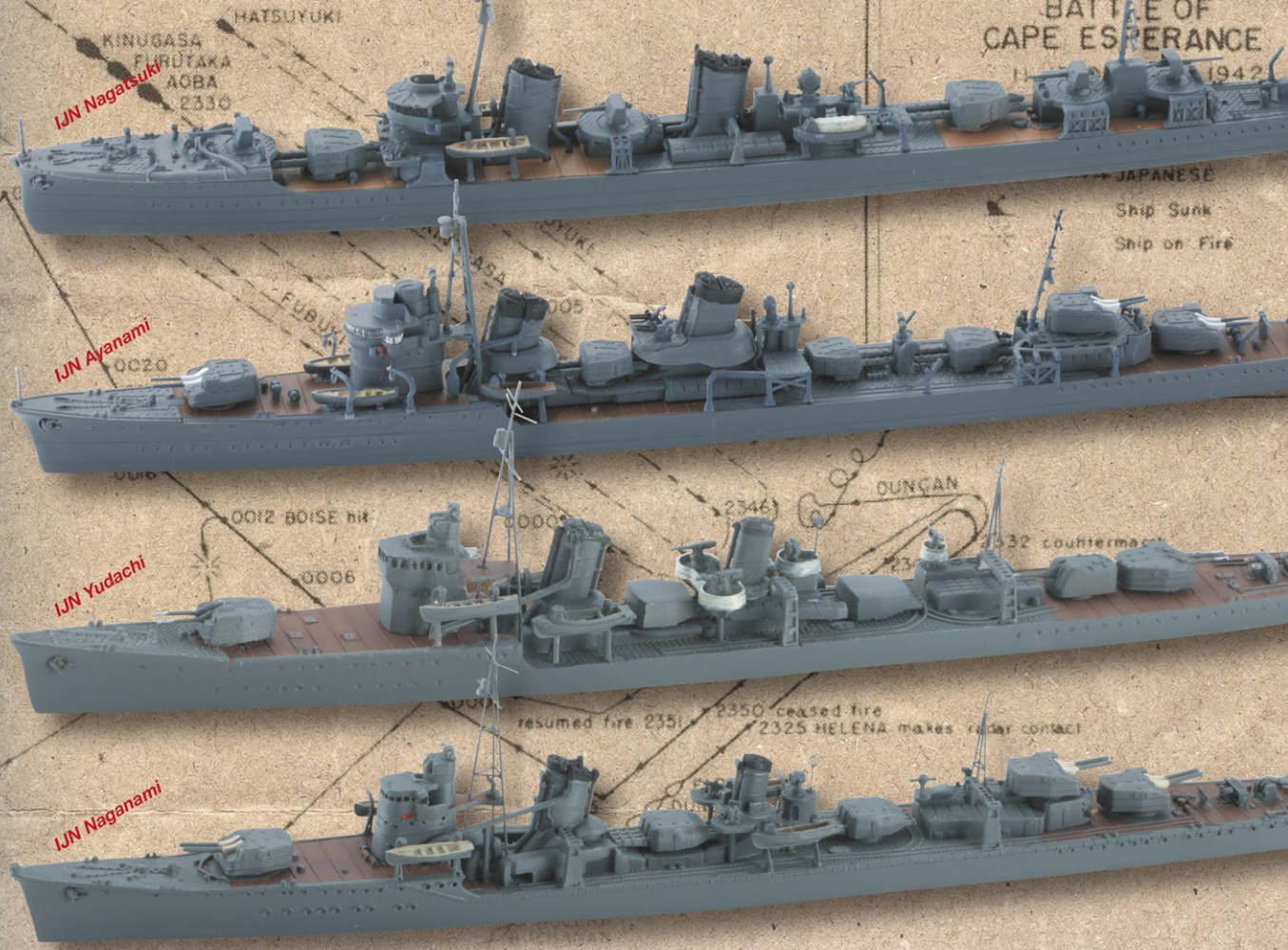
駆逐艦かく戦えり

模型で再現する日米駆逐艦戦史



IJN Destroyers at War

:Modeling IJN and USN Destroyers in the Battle of the Pacific

米波保之／畑中省吾 著

大日本絵画

駆逐艦かく戦えり

模型で再現する日米駆逐艦戦史

IJN Destroyers at War

:Modeling IJN and USN Destroyers in the Battle of the Pacific

米波保之／畑中省吾 著

大日本絵画

本書を買ってくださった皆さんへ……4
太平洋戦争主要海戦地図……6

駆逐艦から見た太平洋戦争史1　真珠湾攻撃……8
スラバヤ沖海戦……9
　日本海軍駆逐艦 朝雲
　日本海軍駆逐艦 村雨
　日本海軍駆逐艦 天津風
　オランダ海軍駆逐艦 ヴィッテ・デ・ヴィット
　イギリス海軍駆逐艦 ジュピター
日米駆逐艦発達史1　軍縮条約時代……17
ディテールアップ／アフターパーツガイド……18
珊瑚海海戦……19
　日本海軍駆逐艦 有明
　日本海軍駆逐艦 漣
　日本海軍駆逐艦 弥生
　アメリカ海軍駆逐艦 エールウィン DD-355
　アメリカ海軍駆逐艦 フェルプス DD-360
日米駆逐艦発達史2　無条約時代～開戦……27
駆逐艦から見た太平洋戦争史2　ミッドウェー海戦……28
第3次ソロモン海戦……29
　日本海軍駆逐艦 綾波
　日本海軍駆逐艦 照月
　日本海軍駆逐艦 夕立
　アメリカ海軍駆逐艦 ラルフタルボット DD-390
　アメリカ海軍駆逐艦 ボイル DD-600
私のおすすめ駆逐艦キット1……37
駆逐艦から見た太平洋戦争史3　南太平洋海戦……38
ルンガ沖夜戦……39
　日本海軍駆逐艦 長波
　日本海軍駆逐艦 黒潮
　日本海軍駆逐艦 涼風
　アメリカ海軍駆逐艦 グリッドリー DD-380
　アメリカ海軍駆逐艦 ラ・ヴァレットDD-448
日米駆逐艦発達史3　開戦以後～終戦まで……47
私のおすすめ駆逐艦キット2……48
クラ湾夜戦……49
　日本海軍駆逐艦 初雪
　日本海軍駆逐艦 夕凪
　日本海軍駆逐艦 長月
　アメリカ海軍駆逐艦 スティーブンス DD-479
　アメリカ海軍駆逐艦 スタンリー DD-478
外国艦駆逐艦キット事情……57
私のおすすめ駆逐艦キット3……58
キスカ島撤退作戦……59
　日本海軍駆逐艦 若葉
　日本海軍駆逐艦 島風
　日本海軍駆逐艦 響
　アメリカ海軍駆逐艦 ヒューズ DD-410
　アメリカ海軍駆逐艦 ペリー DMS-17
シブヤン海海戦……67
　日本海軍駆逐艦 清霜
　日本海軍駆逐艦 島風
　日本海軍駆逐艦 雪風
　アメリカ海軍駆逐艦 カッシン DD-372
　アメリカ海軍駆逐艦 エリソン DMS-19
エンガノ岬沖海戦……75
　日本海軍駆逐艦 秋月
　日本海軍駆逐艦 初月
　日本海軍駆逐艦 桑
　アメリカ海軍駆逐艦 ステレット DD-407
　アメリカ海軍駆逐艦 ザ・サリヴァンズ DD-537
私のおすすめ駆逐艦キット4……83
駆逐艦から見た太平洋戦争史4　多号作戦……84
坊ノ岬沖海戦……85
　日本海軍駆逐艦 冬月
　日本海軍駆逐艦 霞
　日本海軍駆逐艦 初霜
　日本海軍駆逐艦 涼月
　アメリカ海軍駆逐艦 マナート・L・エベール DD-733
　アメリカ海軍駆逐艦 グッドリッチ DD-742
　駆逐艦の編制
私のおすすめ駆逐艦キット5……95

模型で再現する日米駆逐艦戦史

駆逐艦かく戦えり

IJN Destroyers at War

:Modeling IJN and USN Destroyers in the Battle of the Pacific

CONTENTS

本書を買ってくださった皆さんへ

参考文献

ここに挙げた参考文献の多くは昭和期に出版刊行されたもので、現在は入手困難となっているものも多い。しかしながらこれらを上回る良質な資料は現在のところ出版されていない。もし、古書店や古書サイトなどで発見することができたら、ぜひとも手に取っていただきたい。これらの古い本たちから導き出される、新たな発見という宝物を得るために……。

【写真集・豪華本】
写真日本海軍全艦艇史 （KKベストセラーズ）
日本海軍艦艇写真集 駆逐艦 （ダイヤモンド社）
日本海軍艦艇図面集 昭和造船史別冊 （原書房）
海軍艦艇公式図面集 （今日の話題社）
写真／日本の軍艦 第10巻 駆逐艦I （光人社）
写真／日本の軍艦 第11巻 駆逐艦II （光人社）
写真／日本の軍艦 別巻 日本軍艦図面集
各艦機銃、電探、哨信儀等現状調査表【あ号作戦後の兵装位置青図集】（光人社）
【単行本・ムック本】
歴史群像シリーズVol.18 特型駆逐艦（学研）
歴史群像シリーズVol.19 陽炎型駆逐艦（学研）
歴史群像シリーズVol.23 秋月型駆逐艦（学研）
歴史群像シリーズVol.43 松型駆逐艦（学研）
歴史群像シリーズVol.45 真実の艦艇史 （学研）
歴史群像シリーズVol.51 真実の艦艇史2 （学研）
歴史群像シリーズVol.57 艦載兵装の変遷 （学研）
歴史群像シリーズVol.64 睦月型駆逐艦 （学研）
歴史群像シリーズVol.71 完全版・特型駆逐艦 （学研）
太平洋戦史スペシャルVol.4 決定版 日本の水雷戦隊（学研）
軍艦メカ図鑑 日本の駆逐艦 （グランプリ出版）
日本駆逐艦物語 （光人社）
第二次大戦駆逐艦総覧 （大日本絵画）
第二次大戦海戦辞典1939～45（光栄）
太平洋戦争 海戦ガイド（新紀元社）
ルンガ沖の閃光 日本海軍駆逐艦部隊 対 アメリカ海軍巡洋艦部隊（大日本絵画）
【雑誌】
丸スペシャルNo.7特型駆逐艦I （潮書房）
丸スペシャルNo.17特型駆逐艦II （潮書房）
丸スペシャルNo.21特型駆逐艦III （潮書房）
丸スペシャル19 駆逐艦 朝潮型・秋月型（潮書房）
丸スペシャルNo.24駆逐艦 初春型・白露型 潮書房）
丸スペシャルNo.41日本の駆逐艦I （潮書房）
丸スペシャルNo.51日本の駆逐艦II （潮書房）
世界の艦船増刊No.489 新板・連合艦隊華やかなりし頃 （海人社）
世界の艦船増刊No.772 日本駆逐艦史 （海人社）
世界の艦船増刊No.859 アメリカ駆逐艦史 （海人社）
世界の艦船増刊 ネーバル・ヒストリー・シリーズ(3) 日本海軍の水雷戦隊（海人社）
帝国海軍艦艇 真 総ざらい（1）特型駆逐艦 編 （モデルアート社）
【洋書】
U.S. Destroyers: An Illustrated Design History（Naval Inst. Pr.）
United States Navy destroyers of World War II（Sterling Pub. Co;）
Warship Pictorial #12 BENSON/GLEAVES CLASS DESTROYER (Classic Warships)
Fletcher-Class Destroyers (Naval Institute Press)
Anatomy of the ship The Sullivans (Conway Maritime Press)
Sumner-Gearing class Destroyers (Conway Maritime Press)
Profile Morskie (BS Press)
Destroyers of the World War Two (BS Press)
Warship Perspectives (W.R.Press Inc)
in action (Squadron signal publications)
Warship Pictorial (Classic Warship Publishing)
The Kelly's (Naval Institute Press)
U.S.Navy World War 2 Ship Colors (Snyder and Short Enterprises)
【Website】
http://www.navsource.org/
http://www.shipcamouflage.com/

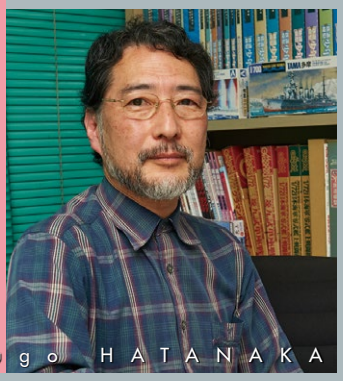
米波保之
日本艦製作

静岡市在住。1997年より地元のガレージキットメーカーで原型師として活動。以降、ピットロード社ハイモールドシリーズの原型製作や青島文化教材社の製作ガイド小冊子付きキット「ガイド＆ディテール」シリーズの小冊子の執筆などを手掛け、2005年「ネイビーヤード／大日本絵画刊」創刊号から「ジミ艦！」の連載を開始。2016年よりペンネームの鯨水庵八十八名義で月刊モデルアートに「艦船諸国漫遊記」を連載。著書に「ジミ艦～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界（シリーズ2巻）／大日本絵画刊」畑中省吾氏との共著書「日本海軍軽巡洋艦1/700マスターモデリングガイド／大日本絵画刊」

本書は大日本絵画刊『ネイビーヤード』のVol.37からVol.45まで連載された「駆逐艦かく戦えり」を1冊にまとめたものであります。この企画は先に刊行された『日本海軍軽巡洋艦1/700マスターモデリングガイド』の製作・執筆陣による続巻ともいえるもので、太平洋戦争における日米の駆逐艦の戦いを主題としたものです。

3年8か月にわたる太平洋戦争で最も酷使されたのは駆逐艦であるといわれています。駆逐艦は最大の特徴、小型高速であるということを活かして偵察哨戒、敵艦への肉薄攻撃、艦隊護衛、果ては物資輸送や戦没した艦艇の乗員救助まで多彩な任務をこなし、対艦、対空、対潜、掃海などとあらゆる戦闘シーンに対応する能力を持っていました。しかし、小型であるがため荒天には弱く、防御力も脆弱、居住性は劣悪といった欠点も併せ持っており、それゆえに駆逐艦乗りは、自らのことを「乞食商売」「車曳き」などと呼んで自嘲していたといいます。しかし、わが海軍の駆逐艦は他国にない強みを持っていました。無航跡で2万mを航走する必殺兵器九三式魚雷＝通称・酸素魚雷を擁し、ことに夜戦においては平時より特殊な訓練を重ね、比類なき戦闘力を誇っていました。しかし、太平洋戦争が開戦すると、わが海軍が想定していた艦隊決戦は生起せず、駆逐艦たちは航空戦や激しい消耗戦、さらには本来の任務とはかけ離れた“ネズミ輸送”などの強行作戦に引き込まれていきます。激戦地となったソロモン海域はアイアンボトム・サウンド―鉄底海峡と呼ばれ、多くの駆逐艦たちが眠っています……。「その駆逐艦たちは太平洋戦争における数々の“海戦”をいかに戦ったのか？」というのが本書のテーマです。代表的な9つの海戦を取り上げ、参加した日本海軍駆逐艦の模型作例を3隻ずつ紹介、実艦の写真や図面も添えて資料性を高めるとともに、現在各メーカーから発売されている駆逐艦のキットを出来るだけ偏りなく使用して、キットガイドとしての側面も考慮しました。また海戦にいたる経緯や戦闘の経過など図を用いて解説、作例で採り上げなかった艦についてもスポットを当てております。さらに、前作からの執筆陣に、アメリカ海軍に造詣の深い箱二三氏も加わり、アメリカ駆逐艦の模型も掲載。日米の駆逐艦の性能や設計思想の違いについても吟味しています。本書が日米の駆逐艦の激しい戦いを振り返るよすがとなれれば幸いです。

畑中省吾
艦型図・企画



1951年、横浜市生まれ。小学生のときは今井科学、中高生のときはレベル、大学生以降はウォーターラインシリーズと、プラモデルは軍艦ばかりを集める。友人に船を語れる者は一人もなく天涯孤独な船キチ人生かと思ったが、タミヤニュースへの投書がきっかけとなり「軍艦雑記帳」の著者・森恒英さんから声を掛けてもらえる僥倖を得られる。森さんのご紹介で艦艇研究のオーソリティたちと知り合い、艦艇趣味を謳歌する境遇になれる

第2次世界大戦に参加した日本艦艇は数多いのですが、そのなかで筆者が熱中して調べた艦種は、巡洋艦と航空母艦でした。駆逐艦にも興味はありましたが、隻数が多く、どれも外形が似ていることから、艦名とスタイルがなかなか一致しませんでした。先般に惜しくも亡くなられた歴史探偵・半藤一利先生が若い頃に書かれた『ルンガ沖夜戦』という本を買って読んで、駆逐艦乗りがすばらしい海の男たちであることを知りました。また筆者の所属する艦艇模型クラブの会長は駆逐艦が大好きで、何年もかけてソリッド模型の駆逐艦を１隻に作るだけでなく、駆逐艦乗りの心意気を滔々と話して聞かせてくれたりします。そうした情報を得たことで筆者も駆逐艦への深い興味をおぼえるようになり、きちんと整理しようと思いたちました。基本とするのは森恒英著『軍艦メカ図鑑　日本の駆逐艦』と『世界の艦船／増刊　日本駆逐艦史』です。とにかく１艦型ずつ、公式図をもとに側面図と平面図を1/350で描いていくことにしました。

駆逐艦をテーマにした雑誌連載の内容を練っているとき、編集長から、“従来の駆逐艦をアイテムとする記事のほとんどが駆逐艦発達史を主としたものなので、新しいテーマを提案したい。例えば、海戦での駆逐艦の活躍をメーンとするのはどうだろう”とのアイデアが出されました。駆逐艦はあらゆる海戦に参加するのみならず、輸送や護衛など、作戦のすべてに出動し働いたワークホースです。それは半藤先生の著書でもじっくり語られていました。本書の共著者・米波保之さんは艦艇模型製作のエキスパートですが、それに加えストーリーテリングの才能が卓越しています。海戦に参加した艦には物語が生まれます。駆逐艦乗りの魂が艦に乗り移ってあたかも人格をもつかのようなストーリーがあります。それを米波さんの筆に託すのはどうだろう、艦の武勇伝を読みながら作る駆逐艦なら思い入れも湧き、大切な１隻ができるのではないか。こうして編集長のアイデアと米波さんの筆力が新しい駆逐艦の本を誕生させたのでした。バックを固めるのは、名人・佐藤美夫さんと山下郁夫さん、ライバルである米駆逐艦は吃水線の会会長の村田博章（PN.箱二三）さんの担当です。そして実艦解説を私が務めました。連載では登場する駆逐艦にバラエティを出そうとランダムに海戦を取り上げました。それを本書では時系列に並べ直し、また連載ではあえて取り上げなかった大きな海戦での駆逐艦の活躍も取り入れてあります。本書で駆逐艦の真の実力を感じ取ってください。

佐藤美夫
日本艦製作

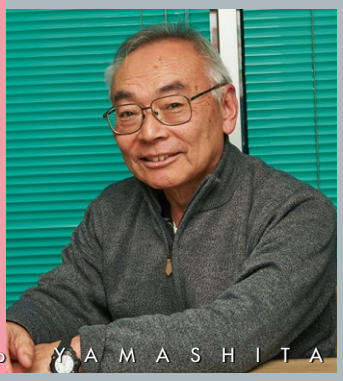
Yoshio SATOU

戦艦「榛名」昭和18年／1999年ピットロードコンテストで金賞入賞。2001年月刊モデルアート5月号に艦船模型ライターとして作例初掲載。作例はピットロード「高雄」を1944年時として製作。2004年モデルアート艦船模型スペシャルNo.14「第2次大戦のイギリス戦艦」に戦艦「バーラム」の作例初掲載後、作例掲載を継続。
2014年『ネイビーヤード　VOL.26』にて連載「やっぱり軽巡が作りたい！」にて作例初掲載。
2021年『ネイビーヤード』に初単独連載が開始。

駆逐艦を初めて製作したのがウォーターラインシリーズが発売された1970年代になってからのことです。「吹雪」という言葉に引かれ購入し製作しました。こんな小さい艦が何をしたのか分からないで製作していたと思います。艦名だけは「吹雪」という荒々しいのに「小さい」というのが第一印象でした。それから数十年経ち再び艦船の模型に興味を持ち製作を再開したのが「駆逐艦」でした。この理由が「小さい」からでした。資料もそれほど必要ないなと思って、写真集など買い集め調査すると「分からない」でした。1973年ころ購入して完成していたタミヤの「吹雪」を分解して写真などを見て作り直したのが艦船模型製作のドツボにハマることになったのです。そんな因縁の「駆逐艦」の連載に参加できたのは光栄でした。「分からない」というのは「駆逐艦」は写真が多いようで必要な写真がないのです。また同型艦の違いというのが「分からない」なのです。今回の連載で苦労したのが同型艦での違いをいかに識別するかです。連載は海戦に参加した「駆逐艦」としての内容なので各海戦による個々の艤装、兵装を同型艦での違いを調査することでした。大戦後半の機銃増設に伴う設備の構造、機銃台座の支持構造が同型艦で異なっていることなどです。増設工事が同型艦で工廠が異なっているためです。「小さい」けど調べると大変となる艦船です。本書でその一部でも参考にしていただければと思いました。また各海戦での各個艦の役割、活躍などの資料になる連載だったと思います。

駆逐艦でのお気に入りは吹雪型です。最初に製作した艦でもあります。第1煙突両舷の缶室給気塔は他の艦では見られない独特のもので、引きつけられるものがあります。たぶん数十年前もこの艦姿が気になって購入したのではないかと思います。これに似たイメージは利根型重巡洋艦かもしれません。実際、最初に購入したのが「利根」でした。巨大な「ダクト」は工場のイメージ。そこから「ブーンブーン」と風の音が聞こえる気がします。この吹雪型がヤマシタホビーから発売されたのは大変に嬉しいことでした。「吹雪」の発売時は即、2隻購入しました。このうち1隻は初回生産品として製作せずに保存しています。「吹雪」から始まった「小さい」「分からない」の駆逐艦は今後も製作を続ける艦船となるでしょう。

山下郁夫
日本艦製作



Ikuo YAMASHITA

1952年、大阪市生まれ。6歳の頃に商店街の文具屋さんの店先で売られていた、袋詰めの飛行機プラモに出会ったことがプラモデルに興味を覚えた始まり。出来上がった玩具より、工作する模型の方が好ましいとの子育て方針で、プラモを買うことに抵抗感がない家庭に育つ。中学生の時に、マルタ港に入港する「フッド」の写真に魅了され、日本海軍に英国海軍が加わり艦船模型にはまる。大学卒業後、WLシリーズに関わる模型メーカーを選び入社。艦船模型には携われなかったが、某社の脱退でWLシリーズ見直し気運が起こり、これぞ「天祐」との思いでリニューアルに関わる。その後、独立して艦船模型パーツ、駆逐艦の開発を行うヤマシタホビーを設立し、現在に至る。

本書で取り上げられている駆逐艦に対する一般的な印象として、小型の艦艇で艦隊護衛という地味でサブ的なイメージが強い。これを反映してか、ウォーターラインシリーズにおいても艦隊主戦力であった戦艦、空母、巡洋艦の人気が高く、リニューアル時代にはついつい開発に力が入りがちだった。

当時某メーカーの開発者であった著者も知名度が高い中・大型艦に傾倒していたが、開発段階における商品内容の吟味や解説文を書く際に、どうしても各艦艇の建造史や戦史に目を通すという作業が必要になる（この作業が最も幸せな時）。その作業の過程の中で、第2次大戦の海戦における駆逐艦が、隠れた主力艦であったことに気が付き、魅力ある存在であることを知った。

駆逐艦という艦種は、そもそも魚雷を主兵装とする水雷艇の攻撃を阻止撃滅する目的で建造された「水雷艇撃滅艦＝水雷艇駆逐艦」として登場する。ところが、皮肉なことに実戦で水雷艇を撃滅するような場面など起こらず、航洋力のある船体を活かして、なんと水雷を搭載し水雷艇の撃滅ではなく、大型艦撃滅用水雷艇に進化してしまう。これはつまり戦闘で水雷艇を撃滅せずに、水雷艇の存在を撃滅したことになる。駆逐艦は、第1次大戦に至って、対潜作戦、魚雷攻撃力で主力艦攻撃艦という地位を得る。ジュットランド沖海戦において、英国大艦隊はドイツ大海艦隊を包囲撃滅できる態勢にあった。にも関わらず、8隻のドイツ駆逐艦の突撃で22隻の戦艦部隊の戦列を乱され、大海艦隊の脱出を許してしまう。著者は、この小艦艇でも搭載する兵器で主力艦を脅かすという戦訓を考慮したのが、日本の「特型駆逐艦」構想であり、各国海軍の「超駆逐艦」構想に結び付いたと考える。駆逐艦は、各国海軍の下で艦隊決戦主義の下に独自の発展をしていく。日本海軍の駆逐艦が艦隊決戦主義を固持し、近代戦にそぐわなかったかのような印象があるが、第2次大戦に身を投じた各国の駆逐艦にも似たような事情があり、日本駆逐艦ばかりが的外れ的な存在だったとは言えない。本書では、太平洋戦争における日本駆逐艦の戦いを、参加した艦艇を模型とともに紹介しているが、その激闘振りと駆逐艦が第2次大戦における主力戦闘艦であったこと、時には輸送、時には警備と酷使された万能艦であったことも理解していただければ有難い。

箱三／村田博章
アメリカ艦製作

Xiang Er San

1961年愛知県豊橋市生まれ同在住。1971年にスタートしたウォーターラインシリーズの申し子として洋上艦船模型の世界へ足を踏み入れる。1993年艦船模型サークル「吃水線の会」（現Waterliners NAVY700 吃水線の会）を主宰発足。模型専門誌ライターとしては作例提供として執筆した『スケールアビエーション』誌を皮切りに『モデルグラフィックス』誌の外国艦を担当し、『ネイビーヤード』創刊後はVol.2よりペンネーム（箱二三）として「太平洋戦争の米駆逐艦」、Vol.13より「US Aircraft Carrier 1 to 8」等不定期連載を執筆。2018年『模型で見るアメリカ空母の全て』（大日本絵画）を執筆。

外国艦担当の筆者が読者の皆様にまず紹介したかったのは戦艦や空母ではなく補助艦艇です。ただし、ウォーターラインシリーズの外国艦は各国の有名主力艦が中心で、補助艦艇は限らた艦のみで系統だったラインナップではありません。人気の旧日本海軍は駆逐艦以上の艦艇が出揃った現状では、少なくとも太平洋戦争での相手方駆逐艦くらいは多くの人に知って欲しいと考えたのです。

ネイビーヤードでは作り込んだ作品を見せるのではなく、「実艦を模型で紹介する」をコンセプトに掲げ、艦型や迷彩色が分かりやすい作例を使った連載「太平洋戦争の米駆逐艦」をスタートさせました。作例はインジェクションプラスチックキットやレジンキャストキットのみならずフルスクラッチにも積極的に取り組み、またキットは年代を変えるなどの改造をして幅広くバリエーションを紹介しています。

本書は帝国海軍駆逐艦の活躍を紹介する連載「駆逐艦かく戦えり」の合本にあたるものです。駆逐艦を主体として各海戦での編成から海戦の推移まで詳細に著す中で、相手方の連合国軍駆逐艦を組合わせることで双方の個艦性能、戦略、戦術などが分かりやすく解説されています。筆者が担当した米艦隊（連合国艦隊）駆逐艦については「太平洋戦争の米駆逐艦」からの抜粋になりますから、必ずしも海戦に登場した艦ばかりではありませんが、同年代の艦を代出させていただいてはおります。当時のスタイル、武装レイアウト、迷彩パターンやバリエーションなども併せて見ていただけたら幸いです。

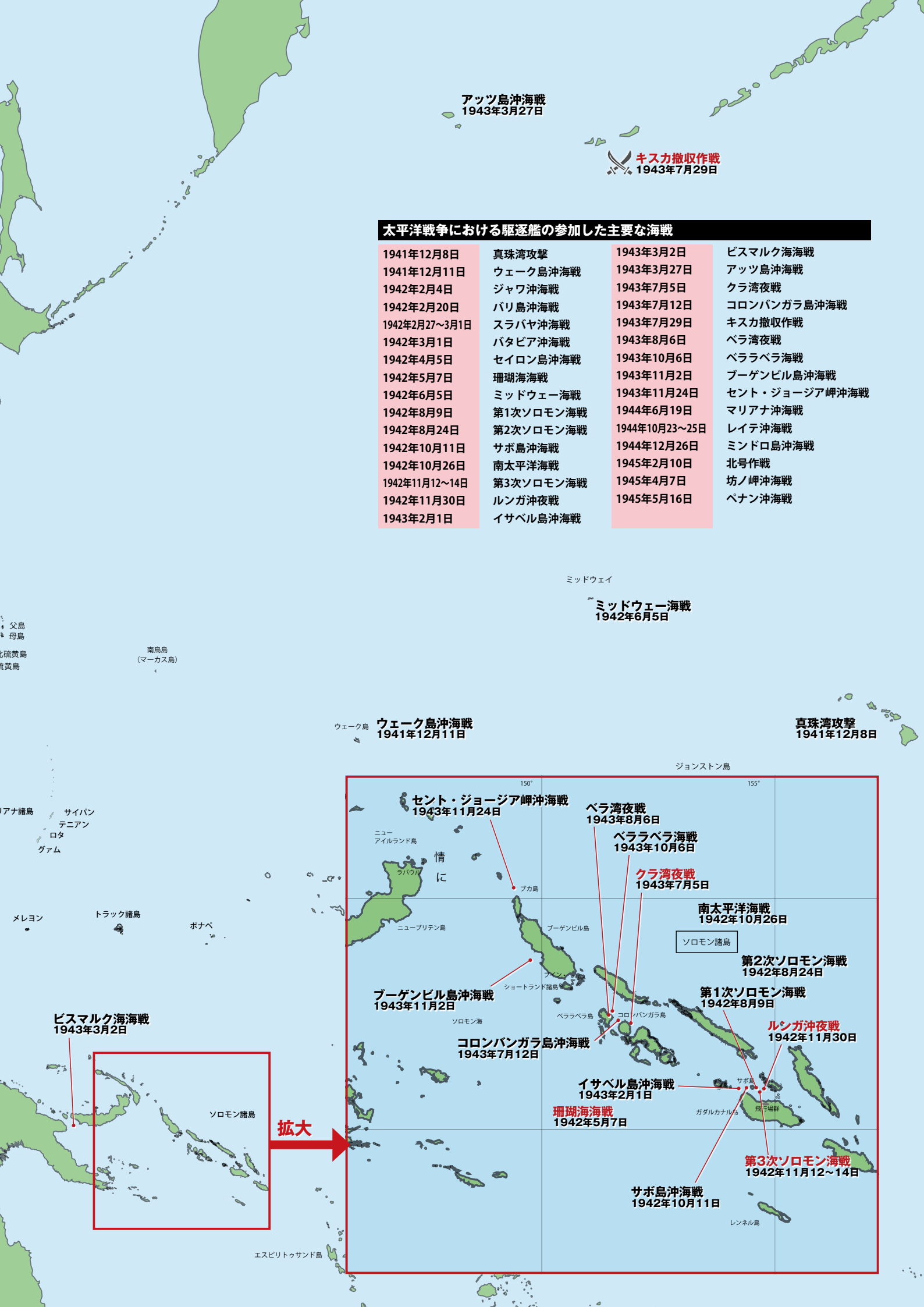
太平洋戦争で旧日本海軍と対時した連合国駆逐艦はアメリカ・イギリス・オランダ・オーストラリアの4カ国に及びますが、各国それぞれのお国柄が出ておりとても興味深いものがあります。武装の種類と装備方法、艦橋の構造及びレーダーの種類と装備方法など各々の海軍ならではの考え方で作られています。ちなみにオランダはイギリスで建造した艦で占められ、オーストラリアは主にイギリスからの譲渡などで賄われています。そんな雑多な艦隊（ABDA艦隊）が戦った蘭印攻防戦は筆者はとても好きで、本書の最初に登場したことはとても嬉しく思っています。

最後に読者の皆様個々の好みは様々ですが、本書をご覧になって各国駆逐艦の魅力を感じ取って頂き、外国駆逐艦の製作に繋がれば幸いです。

太平洋戦争 主要海戦地図

太平洋戦争のほぼすべての海戦に駆逐艦は参加していた。真珠湾攻撃や珊瑚海海戦のような空母同士が戦った海戦においても対潜哨戒や警戒、不時着した搭載機の乗員救助などで戦いに貢献している。駆逐艦の存在なしに水上艦の作戦は不可能だったといっても過言ではないだろう。北はアリューシャン列島から南はオーストラリアまで、東はハワイから西はセイロン島まで2000トン程度の小型艦で縦横無尽に戦った駆逐艦たちの戦いを本書ではお見せしよう。

本書で取り扱う海戦		
スラバヤ沖海戦	P9	ネイビーヤード43号掲載（第7回）
珊瑚海海戦	P19	ネイビーヤード38号掲載（第2回）
第3次ソロモン海戦	P29	ネイビーヤード41号掲載（第5回）
ルンガ沖海戦	P39	ネイビーヤード37号掲載（第1回）
クラ湾夜戦	P49	ネイビーヤード40号掲載（第4回）
キスカ撤収作戦	P59	ネイビーヤード39号掲載（第3回）
シブヤン海海戦	P67	ネイビーヤード44号掲載（第8回）
エンガノ岬沖海戦	P75	ネイビーヤード42号掲載（第6回）
坊ノ岬沖海戦	P85	ネイビーヤード45号掲載（第9回）



太平洋戦争における駆逐艦の参加した主要な海戦

1941年12月8日	真珠湾攻撃	1943年3月2日	ビスマルク海海戦
1941年12月11日	ウェーク島沖海戦	1943年3月27日	アッツ島沖海戦
1942年2月4日	ジャワ沖海戦	1943年7月5日	クラ湾夜戦
1942年2月20日	バリ島沖海戦	1943年7月12日	コロンバンガラ島沖海戦
1942年2月27～3月1日	スラバヤ沖海戦	1943年7月29日	キスカ撤収作戦
1942年3月1日	バタビア沖海戦	1943年8月6日	ベラ湾夜戦
1942年4月5日	セイロン島沖海戦	1943年10月6日	ベララベラ海戦
1942年5月7日	珊瑚海海戦	1943年11月2日	ブーゲンビル島沖海戦
1942年6月5日	ミッドウェー海戦	1943年11月24日	セント・ジョージア岬沖海戦
1942年8月9日	第1次ソロモン海戦	1944年6月19日	マリアナ沖海戦
1942年8月24日	第2次ソロモン海戦	1944年10月23～25日	レイテ沖海戦
1942年10月11日	サボ島沖海戦	1944年12月26日	ミンドロ島沖海戦
1942年10月26日	南太平洋海戦	1945年2月10日	北号作戦
1942年11月12～14日	第3次ソロモン海戦	1945年4月7日	坊ノ岬沖海戦
1942年11月30日	ルンガ沖夜戦	1945年5月16日	ペナン沖海戦
1943年2月1日	イサベル島沖海戦		

駆逐艦から見た太平洋戦争史1

真珠湾攻撃

1941年12月8日
長駆ハワイ沖まで進出し虎の子の空母部隊を護る

文／米波保之

太平洋戦争の火蓋を切ったアメリカ駆逐艦「ウォード」の一撃と大損傷を被りながら再就役を果たしたマハン級の三姉妹

真珠湾攻撃に参加した日本駆逐艦は第1水雷戦隊旗艦「阿武隈」の指揮で第17、第18の2個駆逐隊8隻に第5航空戦隊の直衛を務める「秋雲」を加えた精鋭部隊で、警戒隊として南雲機動部隊の前衛を務めた。いずれも当時最新の陽炎型、朝潮型で構成されていたが直接戦闘には加わっていないので、ここでは真珠湾内に在泊していたアメリカ駆逐艦の戦いについて触れておこう。

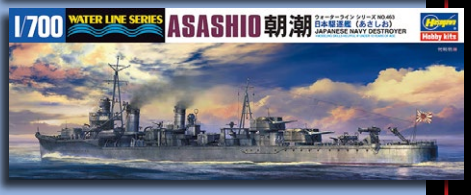
第1次大戦中に建造され予備艦となっていたベテラン駆逐艦「ウォード」は1941年1月15日付で再就役、3月から駆逐艦「アレン」とともに真珠湾口の警戒任務に従事していた。現地時間で12月7日0640時、「ウォード」は真珠湾周辺にある航行制限区域で国籍不明の小型潜水艦を発見し、砲撃および爆雷攻撃を行った。その後海上に重油のようなものが流出したのを視認したため標的を撃沈したものと判断した。彼女が交戦したのは日本海軍の特殊潜航艇（甲標的）であった。「ウォード」の砲撃は結果的に日本海軍機動部隊の艦上機による空襲開始の少なくとも45分以上前になされており、太平洋戦争における日米の最初の戦闘行為として記録されている。1943年、彼女は高速輸送艦に改装されたが1944年にオルモック湾で日本軍の特攻機に襲撃され、1機が艦中央部に命中。味方駆逐艦「オブライエン」の砲撃により処分された。奇しくも真珠湾攻撃から3年後の12月7日、また「オブライエン」の艦長は真珠湾攻撃時に「ウォード」を指揮していたアウターブリッジ少佐が務めていたという幾重にも重なる奇遇であった。

日本攻撃隊の空襲時、真珠湾内には30隻の駆逐艦が停泊していた。マハン級駆逐艦「ショー」は浮きドックYFD-2に入渠中であった。日本軍機による攻撃で「ショー」は前方機銃座に2発、艦橋左舷に1発の計3発の命中弾を被り火災を発生。必死の消火活動が行われたが、消火剤を使い果たしたため、艦を放棄する命令が発せられた。ドックに注水して水没させることにより消火を試みたが火災は鎮火せず、0930時、前部弾薬庫に引火、大爆発を起こした。爆発の規模は戦艦「アリゾナ」に次ぐ大きさであり、遠くからも視認されている。この爆発で彼女の船体前半部はほぼ失われ、竜骨が歪むなど大きく損傷したがドック内にいたため沈没は免れる。1942年1月に応急修理で仮艦首が取り付けられた後、サンフランシスコでおよそ5か月にわたる大修理と近代化改装が施され、1942年6月に再就役して終戦まで残存。11個の従軍星章を受章した。同じくマハン級駆逐艦の「ダウンズ」と「カッシン」は戦艦「ペンシルベニア」と共にオアフ島の第1乾ドックに入渠中であった。「ダウンズ」に250kg爆弾2発が命中。魚雷が誘爆して発生した火災が隣にいた「カッシン」にも延焼。同じ乾ドック内にいた「ペンシルベニア」の火薬庫の誘爆を防止するためドック内に注水したためキールブロックから滑り落ちて横転。「ダウンズ」に接触して被害を拡大させた。両艦はほとんど全損状態となったが、残存部分を本土のメアアイランド海軍造船所に持ち込んで船体を新造。「ダウンズ」は1943年11月に再就役を果たし4つの従軍星章を獲得。「カッシン」は1944年2月に再就役して6つの従軍星章を獲得。両艦とも終戦まで残存している。

真珠湾攻撃に参加した駆逐艦

◇日本海軍
第17駆逐隊　谷風、浦風、浜風、磯風（陽炎型）
第18駆逐隊　陽炎、不知火（陽炎型）、霞、霰（朝潮型）
第5航空戦隊　秋雲（陽炎型）

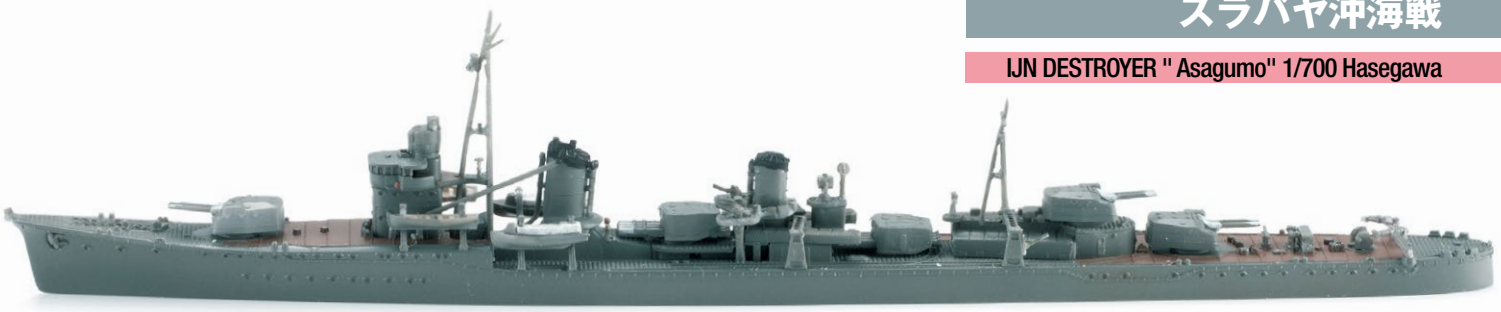
◇アメリカ海軍（真珠湾在泊駆逐艦）
サンプソン級1隻（アレンDD-66）
ウィックス級3隻（ウォードDD-139他）
ファラガット級8隻（エールウィンDD-355他）
ポーター級2隻（セイルフリッジDD-357他）
マハン級8隻（ショーDD375他）
クレイブン級8隻（ブルーDD-387他）



真珠湾攻撃に参加した陽炎型、朝潮型はどちらも最新のキットで製作することができる。ピットロードのスカイウェーブシリーズW213陽炎・就役時は2020年2月の発売。スライド金型を駆使して船体外板の継ぎ目を段差表現とするなど精密感あふれる仕上がりとなる。

ハセガワのウォーターラインシリーズNo.463朝潮は2017年の発売。複雑なマストを一体成型とするなど組み立てやすく精密なキットがリーズナブルな価格で手に入る。なお、同シリーズNo.466霞は大戦後期の状態となっているため、真珠湾攻撃時の「霞」として作る場合は「朝潮」のキットを使用しよう。

IJN DESTROYER " Asagumo" 1/700 Hasegawa



スラバヤ沖海戦

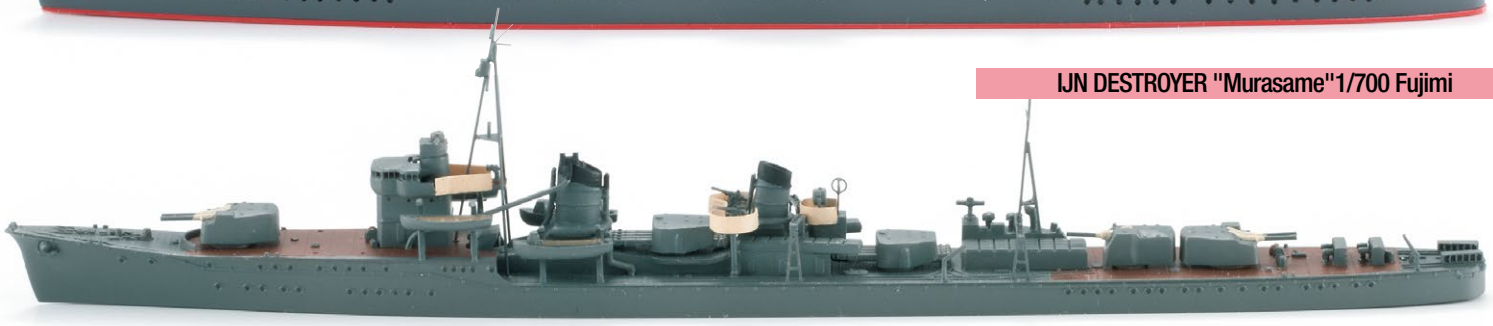
1942年2月27日～3月1日

水雷戦隊、ABDA艦隊を撃破

開戦劈頭の南方作戦において、わが海軍は向かうところ敵なしの進撃を果たす。対する連合軍は米英蘭豪4国混成の連合部隊を編成。蘭印攻防戦の火蓋が切られた……

IJN DESTROYER "Amatsukaze"1/700 Pitroad

IJN DESTROYER "Murasame"1/700 Fujimi



太平洋戦争初の大規模艦隊戦。米英蘭豪連合部隊を殲滅し完全勝利

1937年、蘆溝橋事件に端を発する大日本帝国と抗日民族統一戦線の抗争で国際的に孤立を深めた日本にアメリカが突きつけた石油の禁輸は痛撃であった。開戦を決意した日本は対米英戦争の戦略として南方作戦を企画した。作戦の目的は、香港、マニラ、シンガポールの重要軍事拠点を攻略して東アジアにおける米英勢力を一掃するとともに、資源地帯であるスマトラ、ボルネオ、セレベス、マレーを確保、そしてオランダ領東インド（蘭印）の中心ジャワを最終目標としていた。中央協定によって南方作戦全体の総称は「あ号作戦」と定められ、フィリピン方面は「M作戦」、マレー方面は「E作戦」、オランダ領東インド（蘭印）方面は「H作戦」、グアム方面は「G作戦」、英領ボルネオ方面は「B作戦」、香港方面は「C作戦」、ビスマルク方面は「R作戦」と細かく命名された。1941年10月29日までに陸海軍中央統帥部における作戦計画書類の策定が終わった。日本海軍では南方作戦間の各方面の作戦を「第一段作戦」と呼称していた。

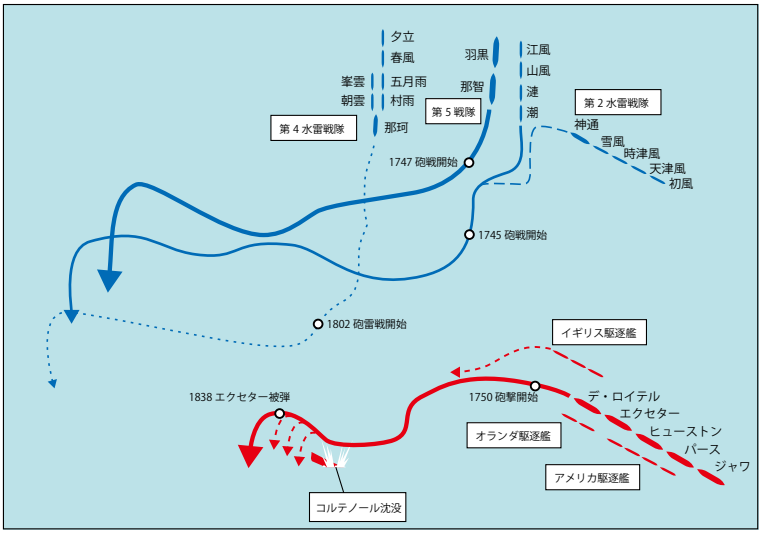
1941年12月8日0130時（日本時間）帝国陸軍第25軍はイギリス領マレーの北端コタバルに上陸を開始、イギリス軍もこれに応戦。真珠湾攻撃より2時間前に始まった太平洋戦争最初の交戦であった。12月10日、上陸部隊を撃滅すべくシンガポールを出撃したイギリス海軍の戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」を日本軍は航空攻撃により撃沈。緒戦でイギリス軍の重要拠点であるマレー半島の南端、シンガポールを確保した日本軍は返す刀で南部フィリピンを制圧しながら、陸海軍中央協定でオランダ軍の本丸であるジャワ島の攻略を企図する作戦を開始した。

日本軍の蘭印作戦に対抗するために、連合軍はアメリカ海軍アジア艦隊司令長官トーマス・C・ハート大将の指揮下、ジャワ島やオーストラリアの防衛のため、アメリカ・イギリス・オランダ・オーストラリアの混成となる米英蘭豪連合部隊を編成。各国の頭文字からABDA艦隊と略称された（A=America、B=Britain、D=Dutch、A=Australia）。艦隊の司令長官は先任順と兵力量から、オランダ海軍カレル・ドールマン少将が務めることになった。欧州でドイツ、イタリアとの闘いが激化しているさなか、各国とも蘭印に派遣できる艦船は巡洋艦1～2隻と駆逐艦数隻に過ぎず、戦力を束ねる必要があったための苦肉の策であった。特に、非英語圏のオランダ人であるドールマン少将の“言葉の壁”は艦隊の泣き所であり、オランダ語を話せるイギリス海軍士官を通訳として主要な艦に乗り組ませたものの細かい情報のやり取りなどでの齟齬を生じやすく、高い練度を誇るわが水上部隊にきめ細かく対応するのは困難であったといわれる。

かくして1942年2月、日本軍は蘭印への侵攻を開始。2月4日のジャワ島沖海戦ではABDA艦隊の主力の一角であるアメリカ重巡洋艦「ヒューストン」がわが航空部隊の攻撃により第3砲塔に直撃弾を受け使用不能となり、軽巡洋艦「マーブルヘッド」、オランダ軽巡洋艦「デ・ロイテル」が小破、20日のバリ島沖海戦ではオランダ駆逐艦「ピートハイン」が沈没、軽巡洋艦「トロンプ」が中破するなどABDA艦隊の戦力は徐々に減殺されており、破竹の勢いで進撃する日本軍を迎え撃つにはいささか手薄であるといえた。さらに2月19日の南雲機動部隊によるポートダーウィン空襲でジャワとオーストラリアの連絡線が遮断され、ジャワ島の防衛はもはや風前の灯火であった。

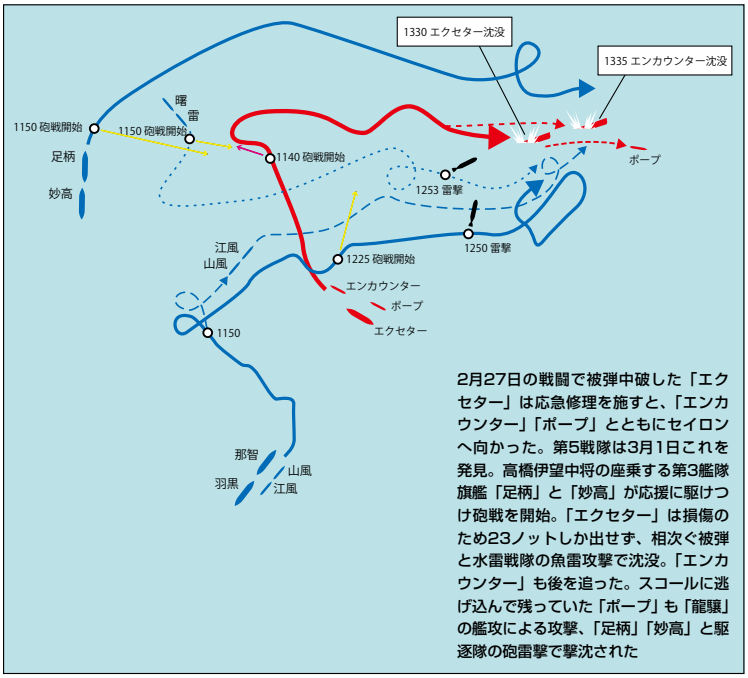
スラバヤ沖海戦／Battle of the Java Sea
1942年2月27日～3月1日

1942年2月18日、日本軍は蘭印攻略を担当する部隊として編成された第16軍5万5000名をジャワ島に上陸させるべく輸送船団を仏印のカムラン湾より出港させた。ドールマン少将の率いるABDA艦隊はこれを阻止するため出撃し、2月27日、日本海軍第3艦隊との間でスラバヤ沖海戦が生起した。日本軍は第5戦隊の重巡洋艦「那智」「羽黒」を中心に軽巡洋艦2隻、駆逐艦14隻。ABDA艦隊はオランダ軽巡洋艦「デ・ロイテル」を旗艦にオランダ軽巡「ジャワ」、イギリス重巡洋艦「エクセター」、アメリカ重巡洋艦「ヒューストン」、オーストラリア軽巡洋艦「パース」のほか駆逐艦12隻と数の上ではほぼ互角であったが、多国籍軍であるABDA艦隊はやはり部隊としての円滑な行動を欠いた。日本側も遠距離砲戦で命中率が低かったり、九三式酸素魚雷の調定が鋭敏過ぎ、自爆が相次ぐなどの失策はあったものの、28日までの交戦でABDA艦隊の旗艦のオランダ軽巡洋艦「デ・ロイテル」を轟沈させ司令官ドールマン少将が戦死。さらにオランダ軽巡洋艦「ジャワ」、駆逐艦「コルテノール」、イギリス駆逐艦「エレクトラ」を撃沈したのに対し、損害は駆逐艦「朝雲」が大破したのみと、海戦はわが軍の圧勝。スラバヤ沖海戦で残存したアメリカ重巡洋艦「ヒューストン」とオーストラリア軽巡洋艦「パース」はジャワ海からの脱出途中の3月1日未明、バンタム湾で第16軍主力の揚陸作業中だった日本軍輸送船団を発見。攻撃を仕掛けたが、南遣艦隊の重巡洋艦「三隈」「最上」が応戦。バタビア沖海戦となり、「ヒューストン」「パース」を共に撃沈。また同日白昼、逃走するイギリス海軍重巡洋艦「エクセター」と駆逐艦「エンカウンター」、アメリカ駆逐艦「ポープ」を発見。航空母艦「龍驤」艦上機の応援も得て全滅させた。これによりABDA艦隊は壊滅し、ジャワ島近海の制海権は日本軍のものとなった。スラバヤ沖海戦は第1次昼戦から掃討戦まで実に46時間に及ぶ、海戦史上稀に見る長い戦いとなった。戦力に勝る日本軍がアウトレンジ戦法に固執したため、砲弾や魚雷の命中率が極めて低く、敵に致命傷を与えるのに手間取ったことが主な要因とされ、第5戦隊司令官の高木武雄少将と第2水雷戦隊の田中頼三少将の戦術指揮は敢闘精神が足りないとの批判を受けることとなった。



1739時、「神通」が敵艦のマストを発見、1747時、第5戦隊が砲撃を開始するも距離が遠く、命中弾は得られなかった。第4水雷戦隊は酸素魚雷27本を発射するも、ほとんどの魚雷が自爆したため戦果は得られず、1822時、2万5000mの遠距離から「羽黒」が8本の酸素魚雷を発射。1838時、「羽黒」の20cm砲弾が遂に「エクセター」に命中。さらに、先ほど「羽黒」が放った魚雷が「コルテノール」を轟沈させた。ABDA艦隊は煙幕を展開して戦場を離脱（↙）。

1915時、再び敵艦隊を捕捉したわが水雷戦隊は16本の魚雷を発射するも損害は与えられず、反撃に転じたABDA艦隊は「エレクトラ」「エンカウンター」の砲撃により「朝雲」を撃破されたが、「エレクトラ」も被弾、沈没した。一旦戦場を離脱したABDA艦隊は、陣容を整え日本の上陸船団を攻撃すべく東方に変針したが2255時、「ジュピター」がオランダ軍が敷設した機雷に触れて炎上。機雷敷設の件は艦隊には知らされていなかった。翌28日0050時、最後の砲戦を挑んできたABDA艦隊に対し、0053時「羽黒」「那智」は12本の酸素魚雷を放ち、「デ・ロイテル」「ジャワ」に各1本が命中。両艦を轟沈させ、海戦の雌雄は決した



2月27日の戦闘で被弾中破した「エクセター」は応急修理を施すと、「エンカウンター」「ポープ」とともにセイロンへ向かった。第5戦隊は3月1日これを発見。高橋伊望中将の座乗する第3艦隊旗艦「足柄」と「妙高」が応援に駆けつけ砲戦を開始。「エクセター」は損傷のため23ノットしか出せず、相次ぐ被弾と水雷戦隊の魚雷攻撃で沈没。「エンカウンター」も後を追った。スコールに逃げ込んで残っていた「ポープ」も「龍驤」の艦攻による攻撃、「足柄」「妙高」と駆逐隊の砲雷撃で撃沈された

天津風（陽炎型駆逐艦）

「天津風」は陽炎型の9番艦。舞鶴海軍工廠で1940年10月26日に竣工。写真は竣工直前に宮津湾沖で実施された公試運転のときに撮影された。同じ舞廠では夕雲型の予算を使って試験的に高温高圧罐を搭載する丙型駆逐艦の建造を予定していた。「天津風」は先行テストのため、400℃／40kg/cm²の罐を搭載した。この高性能罐は成功し、これを搭載の丙型駆逐艦「島風」は公試で40ノットを超すスピードをマークする。

「天津風」は「初風」「雪風」「時津風」と第16駆逐隊を編制。南方攻略作戦を手始めに、スラバヤ沖海戦、ミッドウェー海戦などに参加する。第3次ソロモン海戦で米艦隊の砲撃を受けて罐室や艦橋等に被弾し中破の被害を受ける。トラックへ退避し工作艦「明石」による假修理のあと単艦で帰還し呉海軍工廠で修理を受けた。修理完了後は主に船団護衛を務めた。1944年1月のヒ31船団護衛任務の途中、南シナ海で米潜水艦の雷撃を受けて船体前半が断裂沈没し、船体後部のみがかろうじて救援されサイゴンに入港できた。切断箇所に假艦首をつけて日本での本格修理のため船団に交じって帰途につくが、米軍機の攻撃を受けて最後は厦門に坐礁し艦命を終えた。

福井静夫氏の著書によると、「天津風」が舞鶴にもどることを想定して復旧の準備が進められ、改修のための図面も引かれた。新造する船体は「涼月」のようなナックルつきの簡易構造、艦橋は海防艦のそれのような角型になる予定だったという。どんな姿になったのか興味をそそられる。

（文／畑中省吾）

第3艦隊
高橋伊望中将

第5戦隊
日本海軍重巡洋艦 那智

日本海軍重巡洋艦 羽黒

第7駆逐隊

日本海軍駆逐艦 潮

日本海軍駆逐艦 漣

第24駆逐隊

日本海軍駆逐艦 山風

日本海軍駆逐艦 江風

第2水雷戦隊
日本海軍軽巡洋艦 神通

第16駆逐隊

日本海軍駆逐艦 雪風

日本海軍駆逐艦 時津風

日本海軍駆逐艦 初風

日本海軍駆逐艦 天津風

第4水雷戦隊
日本海軍軽巡洋艦 那珂

第2駆逐隊

日本海軍駆逐艦 村雨

日本海軍駆逐艦 五月雨

日本海軍駆逐艦 春雨

日本海軍駆逐艦 夕立

第9駆逐隊

日本海軍駆逐艦 朝雲

日本海軍駆逐艦 峯雲

日本海軍駆逐艦 夏雲

日本軍の編制
第3艦隊は開戦直前の1940年4月に南方作戦の攻略部隊として編成され、司令長官高橋伊望中将の座乗する旗艦は重巡洋艦「足柄」であった。第5戦隊は重巡洋艦「妙高」を旗艦に「那智」「羽黒」の3隻で編成されていたが、「妙高」がアメリカ軍のB-17の爆撃で中破したため内地へ回航され、「那智」が旗艦となった。第2水雷戦隊は漸減邀撃作戦における前線部隊に位置付けられ、強力な装備と長大な航続力を備えた最新・最強の駆逐艦が投入され、“華の二水戦”と謳われた精鋭部隊である。第16駆逐隊は当時最新鋭の陽炎型駆逐艦4隻で編成されている。第4水雷戦隊は1939年の編制時には栗田健男少将が司令官を務め、スラバヤ沖海戦時には後にスリガオ海峡で壮絶な最期を遂げる西村祥治少将が司令官を務めたことで知られる。第24駆逐隊は白露後期型の「海風」「山風」「江風」「涼風」で編成されていたが「涼風」を損傷で欠き、「海風」は海戦当日、第16軍の輸送船団護衛のため戦闘には不参加。第7駆逐隊は「朧」「曙」「潮」「漣」で編成されていたが太平洋戦争の直前、「朧」は5航戦に転出していた。第2駆逐隊は白露型の4隻。後にソロモンで大立ち回りを演じたことで知られる。第9駆逐隊は朝潮型の「山雲」「夏雲」「朝雲」「峯雲」で編成されていたが「山雲」を触雷損傷で欠き、「夏雲」は24駆「海風」とともに船団護衛のため別動していた。

米英蘭豪連合部隊 1942年2月27日の編制
カレル・W・F・M・ドールマン少将

オランダ部隊
オランダ海軍軽巡洋艦 デ・ロイテル

オランダ海軍軽巡洋艦 ジャワ

オランダ海軍駆逐艦 コルテノール

オランダ海軍駆逐艦 ヴィテ・デ・ヴィット

オーストラリア部隊
オーストラリア海軍軽巡洋艦 パース

イギリス部隊
イギリス海軍重巡洋艦 エクセター

イギリス海軍駆逐艦 エレクトラ

イギリス海軍駆逐艦 エンカウンター

イギリス海軍駆逐艦 ジュピター

アメリカ部隊
アメリカ海軍重巡洋艦 ヒューストン

アメリカ海軍駆逐艦 ジョン・D・エドワーズ

アメリカ海軍駆逐艦 ポール・ジョーンズ

アメリカ海軍駆逐艦 ジョン・D・フォード

アメリカ海軍駆逐艦 アルデン

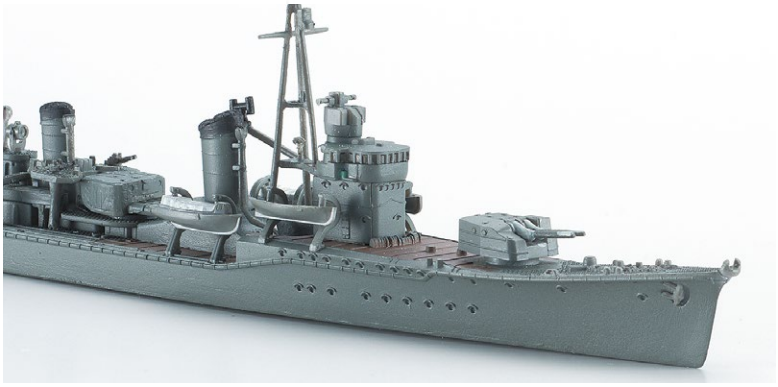
アメリカ海軍駆逐艦 ポープ

米英蘭豪連合部隊の編制
オランダ海軍の駆逐艦「コルテノール」「ヴィテ・デ・ヴィット」はそれぞれ1928年、1930年の竣工だが、スペックで言えば日本の神風型とほぼ同等のもの。イギリス海軍の「エンカウンター」「エレクトラ」はEではじまる艦名のE級駆逐艦で1933年の竣工。本国艦隊では新型駆逐艦が投入され始めていたため東洋に回された、といっては言い過ぎか？「ジュピター」はその新型駆逐艦たるJ級の一艦で、1939年に就役したばかり。イギリス駆逐艦で初めて両用砲を主砲としたクラスであった。アメリカ海軍の駆逐艦5隻は全て第1次大戦時に大量建造された旧式の4本煙突型であるなど寄せ集めの感が否めず、精鋭を集めた日本の水雷戦隊より大幅に見劣りするものであった

朝潮型の魚雷発射管シールドは「初期型」と呼ばれる天面が平らなタイプで、陽炎型以降のものと形が異なる。キットパーツは、この違いをしっかり表現しているが、背の高さが足りないようなので、作例では下にプラ板を貼って嵩上げしてある。また後檣脇のスキッドビームの背面にある魚雷積み込み用の小型クレーンが省略されているので伸ばしランナーで追加した

朝潮型駆逐艦

朝雲 1942年



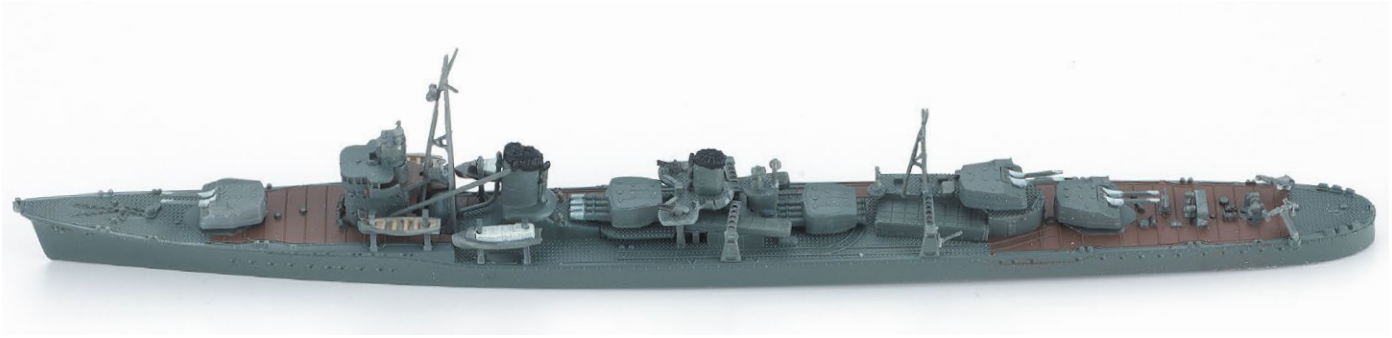
竣工後に発覚した不具合により変更された艦尾形状もキットではしっかり再現されている。主砲砲室はスライド金型により全周にモールドが施され、精密感を高めている。砲身を細く削ってやるとなお良いだろう

前檣は0.3mm径真ちゅう線で製作した。見張り所が省略されているのでハセガワの夕雲型キットの余剰パーツを使用した。前檣のキットパーツを使用する場合でも見張り所は自作するなり取り付けた方がよいだろう。第2煙突前の台座には25mm連装機銃を取り付けてしまったが、時期的に毘式40mm単装機銃がよい。ただし、キットにパーツがないので他から調達する必要がある

白露型駆逐艦

村雨 1942年

艦尾の爆雷投射機、爆雷装填装置は大きさやモールドが良いので抜け部分を黒塗装で表現した。爆雷用ダビットはピットロードの新・日本海軍装備セットNE-05（駆逐艦用）に収録のものを使用した

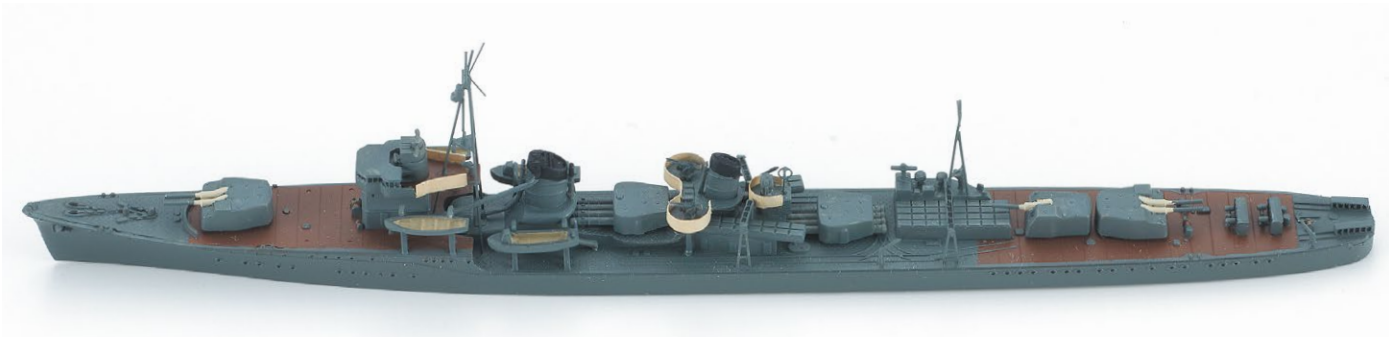


「朝雲」の写真は竣工時の公試のものがあるだけで、戦時中の状態は不明な点が多い。キットは最近のものだけあって、よく研究されているが、唯一公式図面が公開されている「荒潮」をもとにしていると思われ、わずかな違いも見受けられる。船体は、薄く鋭いステムがよく表現され形状的には文句なしだが、艦首部のヒケと底板（B3）の繋ぎ目が目立つので、慎重に処理しておきたいところだ。船体パーツ（A1）の甲板部に一体モールドされている第1煙突の艦首寄りの基部は、やや高く感じられたので、低く削るとともに缶室給気筒のカウル（B21）との繋がりに不連続感が出ないよう、なだらかに削った。また第1煙突後方にモールドされているツノのような突起はキセル型通風筒を表現したものなので、削り取ってジャンクパーツを流用して置き替えた。艦橋をはじめとする上部構造物は特に手を入れる必要はないが、やはり部品の繋ぎ目をきちんと処理しておきたい。主砲砲室（R1）もスライド金型でよく再現されているが、砲身の太さが気になったので、モーターツールで細く削って使用している。魚雷発射管は実艦の写真と比較してシールドの天井の高さが少し足りないように感じられたので、部品E5の開口部上部と下端に0.5mmのプラ板を貼って、嵩上げしてから管体（E1）を組み付けた。スライド金型により一体成型となった前後のマスト（G2、G4）は、このキットの“ウリ”のひとつだろう。やはり少々太く感じられるが、ここはメーカーに敬意を表してモーターツールで出来るだけ細く削って、そのまま使用することとした。第2煙突前の機銃台（G1）も支柱を少し細く削っている。装備する機銃は、大戦中には25mm連装に換装されたといわれるが、1942年2月時点での状況は不明である。作例では13mm連装のままとして、部品M7の銃身をピンセットで上に曲げて、仰角がつくようにして使用している。7.5m内火艇（M2、4）用のダビット（M12）はややオーバースケールに感じられたのでヤマシタホビー「小艦艇装備品セット」のものに交換している。また通風筒が一体モールドとなった烹炊所煙突（B14）は通風筒の部分を分離して、艦首寄りに位置を変更した。

ハセガワ1/700
日本駆逐艦 朝潮 改造

製作・文／米波保之
Modeled and described by Yasuyuki YONENAMI

作例に使用したハセガワ「朝潮」のキットは2017年10月に発売されたばかりの最新作で、見事なプロポーションと、スライド金型を駆使した繊細なモールドで、それまでのキットとは一線を画す出来となっている。キットは大戦前期の状態を再現しているが、同社から先に発売となった夕雲型と形が微妙に異なる魚雷発射管シールドや、姉妹艦で異なるといわれる第2煙突前の機銃は25mm連装と13mm連装のどちらにも対応できるなど、研究も抜かりなくされている。日本駆逐艦の中でもとりわけ資料が少なく不明な点が多い朝潮型だが、このようなすばらしいキットが発売になったのは誠に嬉しい限り。これで日本駆逐艦のキットは、ほぼ満足のいく品質で揃うようになったといえよう。



「村雨」は白露型前期の艦で艦橋が角張った形状をしている。1942年の2月時点では対空兵装強化はしておらず後部煙突前の銃座には毘式40mm単装機銃が2基搭載されていたと思われる。

船体は艦首フェアリーダーが省略されているのでプラ板で作り付けた。

艦橋は、羅針艦橋前部の形状が実艦と異なるので下部を削っている。窓枠はジョーワールド製エッチングパーツ「JPE27G精密窓枠Ver.A」セットに収録されたもので、2種類のパーツを組み合わせた。

前檣は0.3mm径真ちゅう線で製作した。キットでは見張り所が省略されているのでハセガワの夕雲型キットの余剰パーツを使用した。後檣はプラストラクト社の0.3mm径プラ丸棒で製作している。

煙突はトップに格子のモールドがないので実艦写真のイメージに見える。駆逐艦には存在しない内部のギザギザの導板モールドは削っておく。前部煙突基部にある缶室給気口C18は削り込んで天蓋の形状を丸みのある状態にした。烹炊室用煙突C26は排煙口のH形が不充分なのでウォーターラインシリーズ装備セット大型艦船用に収録されたH形煙突のH形部分を移植した。

後部煙突前の機銃座C1の取り付けは後部煙突の組み立て工程16で同時に取り付けたほうがよい。説明書どおりの工程順では後部煙突のジャッキステーのモールドが邪魔で機銃座C1の穴に上から通すことができない。方位探知ループアンテナは0.18mm径銅電線で作り付けている。

予備魚雷格納庫への積み込み装置となるスキッドビームは支柱部の抜けを再現するためにパーツD5（後部）及びパーツD6（前部）を使用せず0.3mm角のプラ材で作り付けた。ボートダビットは厚みを削って薄くしている。吊り下げ滑車に見立てた取り付けダボを切り取っている。よって艦載艇はダボ穴を削り取っている。

主砲は連装砲と単装砲で砲身の太さが異なっていたので砲身部のみ0.5mm径プラ丸棒に替えて統一した。

フジミ 1/700
日本海軍 駆逐艦 村雨・夕立 (白露型 前期型 開戦時)

製作・文／佐藤美夫
Modeled and described by Yoshio SATOU

フジミの白露型前期キットは1941年の開戦時の「村雨」「夕立」の2隻セットなっている。前檣の見張り所が省略されていたり、煙突の内部がギザギザ（導板）のモールドである、など修正が必要な所もあるが全体的には良好なキットといえる。船首楼甲板の艦橋両舷のガンネル（甲板と側面外板との接合部）が丸めてある丸形ガンネルが再現されている。艦橋窓が別パーツなのでエッチングパーツへの置き換えが行い易い。1943年以降の対空兵装強化後の「白露」「春雨」、後期艦の「涼風」「海風」の2隻セットも発売されており、内容は艦橋パーツ等が異なるだけで主要パーツは同じものとなっている。25mm機銃のパーツが連装と3連装が収録されているので1943年～44年前半の作成が可能。戦前から開戦時にするには毘式40mm単装機銃の他からの調達が必要。

ISBN978-4-499-23321-7 C0076 ¥3900E

定価（本体3,900円＋税）

模型で再現する
日米駆逐艦戦史

駆逐艦かく戦えり

IJN Destroyers at War

:Modeling IJN and USN Destroyers in the Battle of the Pacific